

沖縄県の青少年の都市生活観

詫摩 武俊*

要 約

地方出身の青年が就労を目的として一定期間、大都市に居住し、その後、再び郷里に帰る現象のことをUターン現象という。わが国の経済情勢の変化にともない、この現象が4、5年前より目立ってきたのは周知のことである。かつては地方の高校を卒業した青年の多くが大都市に集中したが、現在では郷里に止って、郷里の発展につくしたいと望む者が増えてきた。

本論は、沖縄県の高校生が東京や大阪のような大都市の生活をどのようにみているかに関する質問紙法による調査の結果である。調査は沖縄県下の5つの高等学校の3年生、男子599名、女子614名、計1,213名について1976年秋に行われた。将来の進路に関して、この中の573名は本土に行って働くことを希望し(これをA群とする)、510名は地元にとどまりたいと望んだ(これをB群とする)。のこりの130名はわからないと答えた。A群とB群のあいだにつぎのような差が認められた。

1. A群の親の中にはB群の親よりも親自身が若いときに都会の生活を経験しているものが多い。またA群には本人が都市に行くことを親もまた望んでいることが多い。親の意向や経験が本人の意志決定に反映していると考えられる。
2. 第1子は地元にとどまりたいと望むことが多い。
3. A群は都市の生活を楽しく便利なものと考えているのに対し、B群は都市は犯罪や公害が多く、健康に有害で恐ろしいところというイメージをもっている。
4. 自分の性格を依存的で子どもっぽいと考えているものはB群に多い。学校の成績の自己評価に関しては両群のあいだに差がなかった。
5. 本土で働くことを希望していてもそのまま本土の都市に定住したいというものはごくわずかで、3年以内に再び沖縄に帰ることを予定しているものが多い。

以上のように現在の沖縄の高校生はUターンすることを前提として都市に出ようとするものが多い。家族との連帯感や郷土に対する愛情がきわめて強いと感じられた。

まえがき

1950年頃から70年頃にかけて、わが国において顕著にみられた経済の急激な成長は、地方から大都市に、若年労働者を中心とした大規模な地域間移動をもたらした。とくに1960年代前半における移動は非常に活発で、多数の中学卒業生、高校卒業生が大都市に就労のために集まった。集団就職という言葉がつくれられ、彼等を運ぶための列車が特別に運行されたこともあった。しかし60年代後半から人口の大都市集中傾向は徐々に減少するようになった。たとえば、大都市地域の全体としての人口増加率を1960年～65年、66年～70年、71年～75年の3期間に

分けてみると、首都圏(東京、神奈川、埼玉、千葉)では、17.6%→14.7%→12.0%、近畿地区(大阪、兵庫、京都、奈良)では14.6%→11.3%→8.4%、中京地区(愛知)では14.1%→12.2%→10.0%と推移し、いずれも明瞭な低下傾向となっている。このような低下傾向をもたらした原因のひとつとして青年のUターン現象と、地方の青少年に大都市を忌避するものが増えたことをあげることができる。ここでUターン現象というのは、就労を目的として大都市にきていた青年が再び郷里に帰る現象のことである。

大都市を志向する青年は十数年前に比較するとかなり減少し、郷里にとどまって郷里の発展につくしたいと考えるものが増えているようであるが、しかしまた一方で

* 東京都立大学都市研究センター・人文学部

は青春の日にひとりで大都市の生活を体験したいと思っているものも少なくないようである。本研究は沖縄県の青少年が大都市の生活をどう考えているか、また大都市の生活を体験したいと思っているものとそうでないものとのあいだにどのような違いがあるかを解明しようとしたものである。調査地として沖縄を選んだ理由は、本土から非常に離れた地域であることと、調査の実施にあたって筆者が個人的便宜をもっていただけからである。

予備調査

本調査に先立って沖縄県G市の私立大学学生(夜間部)の学生147名(男子74名,女子73名)について昭和50年12月に予備調査を行った。調査の内容は本土の大都市での生活を希望するかどうか、その理由は何かということと各自が考えることを自由に記述して貰うという形をとった。147名の被験者はいずれも沖縄で生れ、沖縄で育ったもので、ごく少数の他府県出身者はこの資料から除いた。この中で東京・大阪などの大都市に観光などの目的で行ったことのあるものはかなり多く、58.5%に達する。しかし大都市で働いたことがあるものはいなかった。

147名の中で、本土で生活してみたいと答えたものは男子では23.0%(74名のうち17名)、女子37.0%(73名のうち27名)であった。各自が自由にあげた理由を整理してみると次のようになる。

1. 本土で生活してみたいと述べたものの理由

(男子の場合) 大都市の生活を一度は経験してみたいというものが多く、大都市に定住したいというものはなかった。したがって理由としてあげられたことは、大都市でいろいろな社会的知識を身につけたい、沖縄でできないことを若いうちに勉強しておきたい、日本の中心地に一度行ってみたいというのがほとんどであった。

(女子の場合) 女子の場合はやや事情が違ふようである。男子のあげた理由のほかに、親と離れて生活してみたい、他人の目のうるさくないところで自分自身をみつめてみたいという点を理由としてあげていた。大都市のはなやかな消費生活に対する憧れや興味を主な理由にあげたものもいた。

2. 本土で生活してみたくないと述べたものの理由

(男子の場合) 自由に理由を書いてももらったのでさまざまな回答がよせられた。整理してみるとおおよそ次の3つくらいになる。

a) 都市の公害を理由とするもの

都会の騒音、各種の公害、過剰な人口などをあげ、都会はとても人間の住むところではないと断定するタイプのものである。のんびりしたところが大都市にはないので新鮮な空気を吸って生活したいと述べている。

b) 沖縄のためにつくしたいという理由

沖縄は解決すべき問題をたくさんもっている地域である。自分の郷土のために若い力を捧げるべきであって東京などにいくべきではないという主張である。

c) 人間関係を理由とするもの

大都市では人と人との結びつきがない、都会は冷たいということが一般的な情報として伝わっているらしく、自分の性格から考えて大都市に自分は適さない、沖縄で静かに暮らしたいと述べているものが多い。現状に満足しているので、これ以上の生活環境の変化を望まないという意見のものもいた。

(女子の場合) 上記の男子の場合と大きな違いはない。沖縄のためにつくしたいという積極的意向の代りに、沖縄の自然が好きなのでここで静かに生活したいという理由をあげたものが目についた。

雑多な意見を要約すると以上のようになる。沖縄に対する郷土愛の強さが印象的である。この被験者たちは昼間働いているものが大部分である。つまり現に沖縄で職をもっているわけである。同年配の沖縄の青年でいま本土に行っているものはたくさんいる。したがって沖縄の青年全般の意見というよりは、沖縄にいて本土にいていない青年の意見と考えるべきである。

調査

1. 目的 沖縄県の高校生が大都市の生活をどのようにみているか、将来、本土で就労する意図があるものと、地元に残るつもりのもとのに分けた場合、両者の意識、態度、価値観、生活環境、性格の自己評価などに差があるかどうかを比較、検討することが本調査の目的である。

2. 期日及び被験者 昭和51年の9月から11月にかけて行なった。沖縄県立小禄高校、普天間高校、中部工業高校、前原高校、八重山高校の男女の3年生である。被験者総数は2千名を越えるが、このうち男子599名、女子614名、合計1,213名を集計の対象とした。

3. 方法 質問紙法による調査で、それぞれの高校の教室で行なった。質問は26項目である。記入に要する時間は20分前後である。

4. 調査結果 都会に行き働く意志の有無とそれぞれの理由

「将来、本土の大都市で働くつもりがありますか」と質問した。本調査の基本となる項目で「ある」と答えたものをA群、「ない」と答えたものをB群ということにする。この質問の大都市というのは東京や大阪のようなと注記してある。回答の結果は次の通りである。

表1

	男子	女子	計
働くつもりがある	311(51.9)	262(42.7)	573(47.2)
働くつもりがない	224(37.4)	286(46.6)	510(42.0)
無 記 入	64(10.7)	66(10.7)	130(10.7)
計	599	614	1,213

() の中の数字はパーセンテージである。以下同様

男子の方に大都市で働くものが多く、女子にやや少ない。全体の約10%がこの項目に答えていない。これは多分どちらともまだ決めかねているのであろうが、これ以降の項目に関してはこの項目の無答者130名を除き、1,083名について分析することにする。

A群の理由(都会に出て働く理由)の中から頻度の多いものを挙げると次のようになる。

- 1 社会勉強のために都会の生活を体験してみたい。
- 2 大都市には沖縄よりもいい職場がたくさんある。
- 3 ひとりで生活することによって自分を鍛えたい。
- 4 働いてお金が得たい。
- 5 希望する職種は本土の大都市にしかない。
- 6 視野を広げ、知識を豊かにしたい。
- 7 技術を習得したい。
- 8 親元を離れて自活したい。
- 9 都会に憧れている。
- 10 他人から干渉されない生活がしてみたい。

B群の理由(都会に出て働きたくない理由)

- 1 親元を離れたくない。
- 2 沖縄の自然が好き。沖縄から離れたくない。
- 3 長男だから親の世話をしなくてはならない。
- 4 都会は環境が悪い。公害がある。
- 5 空気が悪い。都会の人は冷たい。都会は恐い。都会で自活する自信がない。
- 6 育ったところでのんびりと生活したい。
- 7 親が都会に行くことに反対している。
- 8 沖縄に就職口がある。
- 9 本土には知人がなく不安である。
- 10 本土の大都市はあまりに遠すぎる。

A群の出島理由の中には沖縄には職がないので、やむを得ず都会に行くというのは少なく、都会の生活を若いうちに体験してみたいというのが多い。この中には漠然と都会の生活に憧れているのもあるが、はっきりと一定の資格を取得することを目的としたものもある。

5. A群とB群の比較

つぎにA群とB群を各項目にわたって比較してみることにする。

1) 本人ならびに親の出生地

他県で生れたものと地元で生れたものとは沖縄に対する執着度に差があるのではないかと考えた。しかし被調査者の圧倒的多数は沖縄県の生れて、他県で生れたものは17名(1.6%)に過ぎない。A群とB群のあいだにも差はない。

親の出生地についても父親の92.1%、母親の93.3%は沖縄の生れである。無答を除いて沖縄以外で生れた父親は6.2%、母親は5.9%である。親のいずれかが他府県の生れであることと本人の出島意志とのあいだにはとくに関係は認められない。しかし両親とも他府県の生れのものがごく少数あるが、この場合にその子どもの出島意志は高くなるようである。

2) 親自身が本土で生活した経験の有無

親が若い頃、本土で生活したことがあれば、その回想などを本人も家庭で聞く機会があるであろう。それが本人の本土に対する指向性を高めるかもしれない。しかしまた親の話の内容によっては逆に本土に行く意欲が減退することになるかもしれない。今回の調査では親の都市生活の内容が快なものであったか不快なものであったか調べることはできなかった。表2は親の本土生活の経験の有無と子どもの出島意志の有無との関係を示したものである。

父親が本土生活の経験をもっているものがA群に多くもたないものがB群に多かった。(χ²=6.70, df=1, p<0.01)

母親が本土生活の経験をもつものがA群に多く、もたないものがB群に多いという傾向は認められるが、この差は有意ではない。両親とも本土生活の経験をもつものと、ともにもたないものとに分けると前者にはA群が多く、後者にはB群が多い。(χ²=8.34, df=1, p<0.005)。

表2 親の本土生活の経験の有無

		父親の本土生活の経験			母親の本土生活の経験			両親とも	
		ある	ない	無答	ある	ない	無答	ある	ない
A 群		225	292	56	183	341	49	114	236
	N=573	39.3	51.0	9.7	31.9	59.5	8.6	19.9	41.2
B 群		167	304	39	142	344	24	75	256
	N=510	32.7	59.6	7.7	27.8	67.5	4.7	14.7	50.2

(A群, B群の下段の数字は%)

3) 父親の職業

父親の職業を第1次産業（農林、水産業）、第2次産業（鉱業、製造業、建設業）、第3次産業（電気・ガス・水道・運輸通信・商業・金融・不動産・サービス・公務）と沖縄に比較的多い軍雇用員とに分け、A群とB群について比較した。（表3） A群とB群とでは父親の職業の分布に差があり、 $(\chi^2=8.28, df=3, p<0.05)$ 、A群の方に第2次産業に属するものが多く、B群の方に第3次産業に属するものが多い。

表3 父親の職業

	第1次産業	第2次産業	第3次産業	軍雇用員	計
A 群	34 (8.7)	84 (21.5)	235 (60.3)	37 (9.4)	390
B 群	22 (5.8)	59 (15.5)	262 (68.9)	37 (9.7)	380

4) どこから通学しているか

沖縄の高校生の中には自宅から通学することが時間的に困難で下宿をしているものがある。高校のときから家庭外で生活しているとひとりで暮すことに慣れ、それが都会指向に発展するかと考えてみた。今回の被調査者の中で下宿しているものは15名（1.4%）に過ぎなかったが、この中の12名はA群に含まれるものであった。

5) 家族数

自分を含めて家族数は何人かと質問した。家族数が多いと人間関係が煩雑になることが多く、このことが島を出て本土に向う動機のひとつになるかと考えた。表4のように家族の規模を4人以下の比較的小さいもの、5～7人の中程度、8人以上の大きいものと3つに分け、A群とB群を比較した。カイ自乗検定の結果によると両群の差は有意でA群の方に家族数8人以上の場合が多く、B群の方に4人以下の場合が多いといえる。 $(\chi^2=21.91, df=2, p<0.005)$ 。なおこの高校生たちの平均同居家族数は6.27人で、この年度のわが国全体の一世帯あたりの平均人数3.44人に比べて著しく多くなっている。

表4 家族数

	2～4人	5～7人	8人以上	計
A 群	63(11.1)	349(61.7)	154(27.2)	566
B 群	92(18.3)	325(64.6)	86(17.1)	503

6) 出生順位

家族数の問題とも関係するが、沖縄では第1子は家業

をつぎ、あるいは家事を手伝うという意味で地元に残ることが多いといわれている。被調査者の中にひとりっ子が少数あったが、これを第1子の中を含め、中間の子ども、末の子どもと3つに分けて、A群とB群のあいだに差があるかどうかを検討した（表5）。 $\chi^2=11.42 (df=2, p<0.005)$ で、A群には中間の子どもが多く、B群には第1子が多く含まれているといえる。第1子やひとりっ子は地元にとどまることが多いのである。

表5 出生順位

	第1子	中間子	末子	計
A 群	120(21.5)	290(51.9)	149(26.6)	559
B 群	143(29.4)	207(42.6)	136(28.0)	486

7) 本土の都会に行った経験の有無

本土に復帰後、本土に行った経験のある高校生は多くなり、この被調査者の52.5%は行ったことがあると答えている。一度でも本土にいくと、再び行きたくなるか、あるいは一度いくとそれでもう十分と考えてしまうか、つまり本土に行った経験のあるものとなないものとのあいだに出島の意志に関して差があるかどうかを問題としてみた（表6）。しかし検定の結果、 $(\chi^2=3.20, df=1)$ A群とB群のあいだに有意な差は認められなかった。

表6 本土に行った経験

	あ	な	計
A 群	282(49.9)	283(50.1)	565
B 群	277(55.4)	223(44.6)	500

8) 都会のイメージ

今日では都会のさまざまな情報がマスコミなどを通して地方に伝えられている。さらに沖縄には毎年多数の観光客が訪れている。これらを通して都会のイメージをつくることができる。表7は「東京や大阪のような大都市はどんなところだと思いますか」と質問し、表7に示したの言葉の中からあてはまると考えられるものにくつても○印をつけてもらった結果である。表においては上段に比較的良好イメージを、下段に悪いイメージを示す言葉をあげたが、実際に使用した調査票ではばらばらに配列してある。表の中の数字はA、B両群の被調査者の中でどれだけのものがそれぞれの言葉を選択したかを示している。

A群とB群とは共通する面も多い。たとえば、両群とも過半数のものが大都市というところはごみごみして

いて、公害の多いところだと思っている。また半数くらいの方が娯楽の多いところと考えている。生活しにくいとみるものの方が生活しやすいとみるものより多く、それぞれ3分の1前後のものが、文化の程度は高いが人が冷たく、健康的でないとみている。これらはいずれも自分が現在住んでいる沖縄の生活環境と比較して抱いたイメージであると考えられる。

A群とB群を比較してみると興味深い点がある。たとえばA群には都会を楽しいとみるものの方が、こわいとみるものより多く、B群はこの逆である。また生活しやすいとみるものはB群よりA群に多く、生活しにくいとみるものはA群よりB群に多い。ひとつの言葉を選択したものがA群、B群のいずれに多いかという点を検討してみた。統計的に有意な差の認められたのは次の通りである。B群に比してA群に多いのは「楽しい」と「生活しやすい」の2項目、A群に比してB群に多いのは「こわい」、「ごみごみしている」、「生活しにくい」、「健康的でない」、「犯罪が多い」、「公害が多い」の6項目であった。総合的にみて都会について良いイメージを抱いているものが、地元を離れたいという意向をもつA群に多く、B群には都会について否定的なイメージをもつものが多い。地元を離れ都会に行ってみたいという憧れをもっているからこそ都会をいいところと考えているともいえる。

表7 本土の都市のイメージ

	A 群 N=573	B 群 N=510
楽しい	107(18.7)	59(11.6)
生活しやすい	52(9.1)	15(2.9)
文化の程度が高い	216(37.7)	175(34.3)
娯楽が多い	279(48.7)	273(53.5)
よい学校がある	140(24.4)	120(23.5)
よい就職口がある	107(18.7)	96(18.8)
わずらわしさが無い	48(8.4)	32(6.3)
こわい	94(16.4)	122(23.9)
ごみごみしている	401(70.0)	388(76.1)
人が冷たい	220(38.4)	181(35.5)
生活しにくい	212(37.0)	261(51.2)
健康的でない	167(29.1)	183(35.9)
犯罪が多い	124(21.6)	138(27.1)
公害が多い	352(61.4)	385(75.5)

9) 性格の自己認知

性格や行動の特徴を示す言葉を24項目あげ、その中から自分にあてはまると思う項目をいくつでも自由に選択してもらった。表8はその結果で、A、B両群の被調査

者のうち、どれだけの者が該当する言葉を選択しているかを示している。項目の選択傾向に関して両群のあいだに大きな差異は認められない。つまり自分自身をあきっぽい、のんき、意志が弱い、内気、短気、神経質、決断力がない、ロベた、あわてものと認知しているものがこれらの沖縄の高校生には多く、不親切、冷淡、融通がきかない、ずうずうしい、おしゃれなどとみているものが少ない。両群を比較して選択傾向に有意な差のあったのは「甘ったれ」、「子どもっぽい」、「あわてもの」の3つでいずれもB群に多かった。

表8 性格の自己評価

	A群 N=573	B群 N=510
あきっぽい	204(35.6)	163(32.0)
甘ったれ	89(15.5)	121(23.7)
のんき	227(39.6)	204(40.0)
意志が弱い	202(35.3)	183(35.9)
臆病	72(12.6)	66(12.9)
内気	170(29.7)	139(27.3)
理屈っぽい	75(13.1)	55(10.8)
感傷的	142(24.8)	127(24.9)
苦勞性	82(15.4)	68(13.3)
子どもっぽい	90(15.7)	104(20.4)
嫉妬深い	60(10.5)	58(11.4)
短気	166(29.0)	149(29.2)
みえっぱり	62(10.8)	62(12.2)
不親切	40(7.0)	43(8.4)
冷淡	38(6.6)	27(5.3)
おしゃべり	107(18.7)	107(21.0)
ばか正直	54(9.4)	54(10.6)
神経質	164(28.6)	162(31.8)
融通がきかない	39(6.8)	45(8.8)
ずうずうしい	24(4.2)	29(5.7)
おしゃれ	51(8.9)	44(8.6)
決断力がない	168(29.3)	155(30.4)
ロベた	181(31.6)	166(32.5)
あわてもの	185(32.3)	196(38.4)

10) 高校での成績

高校での成績を表9のように5段階に分けた場合、これについての自己評価にA群とB群とのあいだで差があるかどうかを検討してみた。これは学校に保存されている資料によるのではなく、各自が自分の成績をどう考えているかという点に関してである。A群の方がやや自己評価が低いようであるが、有意な差は認められなかった。

表9 成績の自己評価

	上	中の上	中	中の下	下	計
A 群	8 (1.6)	36 (7.0)	269 (52.1)	131 (25.4)	72 (14.0)	516
B 群	13 (2.8)	39 (8.3)	264 (56.3)	97 (20.7)	56 (11.9)	469

11) 親の意向

「あなたの両親は、あなたが高校卒業後、本土に行くことを望んでいますか」と質問した。その結果をA群とB群で比較してみると表10ようになる。親の意向といっても親に直接、息子や娘が本土に行くことを望んでいますかと質問したものではない。本人たちが親の意向を推察した結果である。したがって親がどう考えているかわからないというものが両群あわせると42%くらいいる。これを除いて両群を比較すると結果は明瞭である。すなわちA群には親が望んでいるというものがB群より多く、親が望んでいないというものはB群に多い。 $(\chi^2=79.21, df=2, p<0.005)$

表10 親は都会に行くことを望んでいるか

	望んでいる	望んでいない	わからない	計
A 群	114(20.7)	179(32.5)	257(46.7)	550
B 群	32(6.6)	279(57.2)	177(36.3)	488

この被調査者たちの場合には親の意向が本人の意志決定に関与したり、それを支持しているのである。なお子どもが男子である場合と女子である場合とで親の意向に差があるのではないかと考えられたが有意な差は認められなかった。AB両群を通して本人が本土に行くことを望んでいる親が14%程度しかいないということは、本土での生活に不安をもつものが多いということであろう。

12) 配偶者の選択

将来、結婚する場合、その相手の人は沖縄の人がいいと思いますかと質問した。高校3年生にはやや難しい質問で男子の50.6%、女子の57.2%はわからないと答えている。結婚相手は地元の人がいいと思わないと答えたものは男子の5.2%、女子の4.5%で同郷人に対する愛着の強さを示している。結婚相手は沖縄の人がいいかどうかという点に関して男子にはAB両群間に差は認められなかった。しかし女子においてはB群に沖縄の人がよく、A群にはそうでないと答えたものが多かった。 $(\chi^2=9.21, df=2, p<0.025)$

なお、それぞれの理由についても質問したので、回答を要約してみる。まず沖縄の人がいいという理由には気

心がしれている、親しみやすい、考え方が似ている、沖縄の人はやさしくて人情味がある、美人が多い、親がそれを望んでいる、ずっと沖縄に住みたい、などという意見が多かった。ほかに本土の人は冷たい、本土の人と結婚するとばかにされるといふものもあった。すでに愛している人がいると答えたものもいた。

これに対して、沖縄の人と結婚したくないと答えたものは、その理由として次のようなことを述べた。沖もち縄の人は色が黒い、美人がない(男子)、広い視野をたい、血が濃くなるという子どもが生れないということのほか、少数ではあるが自分は外国人と結婚したいという意見が男子にも女子にもあった。他の地域ではあまりみられない特徴であろう。

表11 配偶者は沖縄の人がいいか

		はい	いいえ	わからない	計
A 群	男子	132(44.0)	17(5.7)	151(50.3)	300
	女子	88(34.2)	18(7.0)	151(58.8)	257
B 群	男子	97(44.5)	10(4.6)	111(50.9)	218
	女子	116(42.0)	6(2.2)	154(55.8)	276

13) 東京と沖縄との比較

「生活する場所として東京と沖縄を比べてみて下さい。そして東京と比べて沖縄のいいところとわるいところをあげて下さい」と質問した。A群、B群を通して両者を比較した場合にどんな意見が述べられたかを要約すると次のようになる。

沖縄のよいところとして指摘されたのは次の点であった。

- 環境に関して——自然(とくに海)が美しい、公害がない、静かである、空气がいい、ごみごみしていない、気候が暖かい。
- 沖縄居住者の特徴に関して——人情にあつい、心と心のふれ合いがある、暖かい、親切、やさしい、思いやりがある、素朴、のんびりしている、正直である、こせこせしていない、近所づきあいがある、郷土愛が強い。
- その他——人が少なく、ひろびろとしている、食べ物ものが豊富、生活費が安くてすむ。

沖縄の悪い点としてあげられたのは次のようなことであった。

- 環境に関して——公共の施設や設備の不備、医療のおくれ、学校が少ない、娯楽に乏しい、生活水準が低い、文化的に遅れている、職場が少ない、夏が暑い、

雨が多い、台風がくる、交通が不便。

b) 沖縄居住者の特徴について——人のうわさばかりする、つきあいが面倒、しきたりがうるさい、時間にルーズ、ことばがわるい、消極的、閉鎖的、時間を守らない、非行が多い

c) その他——物価が高い、土地が狭い、失業者が多い、米軍の基地がある、車が多い。

14) 東京の青年と沖縄の青年の比較

「東京でずっと生活している青年と、沖縄でずっと生活している青年を比べてみて、沖縄の人のいい点とわるい点をあげて下さい」と質問した。結果は次の通りで、これも自由に記述されたものを要約したものである。

沖縄の青年のいいところ

親切、健康的、たくましい、のびのびしている、親しみやすい、素直、素朴、さわやか、人がいい、明るい、思いやりがある、まじめ、きどらない、勤勉、頼りになる、根性がある、など。

沖縄の青年のわるいところ

消極的、言葉がわるい、見識が狭い、のんびりしすぎている、教養がない、決断力がない、内気すぎる、意志が弱い、時間にルーズ、短気、自主性がない、劣等感をもつ、非社交的、他人のことに干渉が多い、粗野、センスが悪い、みえっぱり、保守的、など。

6 A群についての補足調査

都会に出て働くつもりのあるものだけにいくつかの質問項目を追加した。その結果の概要は次の通りである。

1) 希望する場所

東京を中心とする首都圏に行きたいというものが7割以上を占め、阪神地方が2割、残りは名古屋、福岡、札幌など各地に分散している。

2) 希望する職種

男女を通して多いのは事務的な仕事、出版・放送・新聞などのマスコミ関係、サービス業、技術をいかせる仕事などである。芸能界に入りたいというのも少数ではあるがいる。

男子だけが望むものとしては自動車の修理や整備に関する仕事、電気・機械・建築・設計関係の仕事、運輸や通信に関する仕事などがある。警察官やガードマンを志望するものもいる。女子だけの希望する職種には保育士、栄養士、看護婦、美容師、薬剤師、デパートの店員、交換手、バスガイドなどがある、洋裁を習ったり、ファッションデザイナーになることを望んでいるものもいる。多くはないが秘書とかスチュワーデスになりたいというものもいた。

3) 大都市での生活についての不安

ことば、たべもの、気温、友人、土地不案内、費用などの項目をあげ、大都市で生活するとしたら不安に思うことはどれかと質問した。いくつ選択しても差支えないことになっている。これらの中で不安に思うこととしてもっとも多く選択されたのは「友人」である。これは今までの友人と別れて、新しい職場で友人ができるだろうかという不安であろう。2番目は「費用」である。物価の高いところで収入だけで生活していけるだろうかという問題である。次は「土地不案内」、「ことば」、「気温」、「食べ物」である。しかし食べものや気温のことで不安に思うものは10%内外である。男子と女子とを比べると一般に女子の方が不安に思うことが多いようである。

4) 定住の意志

本土にいったらそのまま定住したいですかと質問した。これに対して定住したいと答えたものは男子の6.8%、女子の3.1%だけである。はっきりと定住したくないと答えたものは男子の62.4%、女子の75.6%で、のこりはわからないと述べている。定住したいというものはごとわずかで、大部分はUターンすることを予想して本土に行くのである。

次に定住する意志のないものに何年くらいしたら沖縄に帰りたいと考えていますかと質問した。1年以内というものは少ないが、3年以内と考えているものが男子で53.6%、女子69.0%で、3年乃至5年が男子の38.0%、女子の24.5%である。6年以上の滞在を予定しているものは男子で8.4%、女子で6.5%である。結婚の問題と関連するためと考えられるが本土で働く期間として考えている年数は女子の方が短い。

7 まとめ

沖縄県の高校生の都市生活観に関する調査から得られた結論を個条書きにして述べると次のようになる。この調査は高校卒業後、本土の都市に行って働くつもりのあるもの(A群 573名)と、地元に残るつもりのも(B群 510名)に分けて比較したものである。

- 1 両親あるいは片親が若いときに都市生活の経験があるると、子どももまた都会に出たがるようになる。
- 2 第1子(とくに長男)は地元にとどまり、中間の子どもが出ていくつもりになることが多い。
- 3 両親の意向はこの問題に関して大きな影響を与えている。すなわち、両親が子どもが都会に行くことを望んでいる場合は、子どももまたそれを望むようになる。しかし両親の意向を無視するものもいる。
- 4 家族数が多くなると都市に出たがるようになる。
- 5 都市生活に対する好意度と故郷を離れる意志の有

無とは関係がある。すなわち都市に行くことを望んでいるものはそうでないものよりも都市生活を好意的にみている。

- 6 都市に行きたがるかどうかは、本人たちの性格の自己評価と関係することがある。すなわち、自分を甘ったれとか子どもっぽいと思っているものは故郷を離れた生活を望んでいない。しかしA群とB群のあいだに差の見出せなかった性格特徴も多かった。
- 7 大都市で生活する場合に、予想される不安としては友人のことをあげるものが多い。つまりいい友人ができるかどうかということで、この不安はとくに女子に

著しい。

- 8 本土の都市に行くつもりのもので、そのまま本土に定住したいと思っているものはごくわずかである。そして都市滞在期間を3年以内と考えているものが過半数を占めている。

以上の諸結果から現在の沖縄の高校生はUターンすることを前提として都市に出ようとするものが非常に多いといえる。その理由としては家族との結合の強さ、郷土に対する愛着、経済上の諸事情、大都市の公害問題などが考えられる。